

ふるさとの歴史



— 貴重な先輩の 足跡を偲びつつ —

郷土研究会会長 野呂 巳之松

序にかえて

私達の郷土は、祖先が、親が、血の汗を流し、忍耐と苦渋とを積み重ね、明日への希望を燃やしつづけながら切り開いた土地につくられたものなのです。路傍に何気なく建てられている、碑、地藏尊、あるいは構造物などに、郷土創生の歴史を知ることができ、後世に申し伝えなければならないなにかがあるように思います。このことは現代の繁栄の中に埋没させてはならないことなのです。

明治31年よりの開拓の証人ともいえる、事象、口伝、そして器具、用具の中から、光陰は流れて、ときとともに失われゆくものが、無言で物語る言葉の中に、過ぎし遺産を、確実に申し継ぐためにも、又、次代を担う人々に、明るい後世への発展を叶えてもらうためにも。今こそ失われゆくものを、掘り起し書きしるし、形として残さなければならない。大切なものが秘められているのです。

このたび、多くの人々、特に古老の方々の厚いご協力を頂いて、機関誌「郷土」を発行することが出来ましたことを心から感謝申し上げます。

これを、郷土発展の記念碑の一つといたしたいと念願し、会員一同と共に努力いたしております。ご高覧いただければ、これに過ぎる喜びはございません。



上川郡人舞村宇新内に於ける移住当時の開墾

明治44年7月27日 河西支庁発行

野呂所蔵写真帖より

※ 新得駅通所跡の由来 ※

駅通所は、明治33年駅通所規定が制定され、開拓移住民や一般旅行者の交通に不便のないよう要所に設置されるようになった。

開拓の先人達は十勝川を遡行するかあるいは徒歩により荷を背負い子供の手を引き道なき道を妻を励ましながら困難を極めて目的地に到達したのである。

新得駅通所は、明治31年10月帯広から旭川に通ずる石狩道路の開通に伴って、明治32年8月、当初パンケシントク人馬車継立所として国費をもって設置され、その後新得駅通所と改称、官馬7頭馬車1台、建物はおよそ百平方メートルで12畳1室旦那用、8畳と6畳一般用の3室を備え、鎌谷与七が取扱人となる。

水利と見晴らしのよい、中新得川の上流、石狩道路添いのこの場所が選ばれた。

当時の駅行路は、帯広—清水—新得—石狩串内であり、人馬の往来は1日平均7～8名、多い時には30余名にもものぼったという。

— 時は流れて —

明治40年9月8日、旧狩勝線の開通によりその任務を終え、翌年3月、8年余の駅通所経営は廃止された。

駅通所間距離

新得—清水	8.84 K	(2里9町)
新得—帯広	39.6 K	(10里3町)
新得—串内	9.96 K	(2里19町20間)

昭和58年8月 新得町 建立
(資料調査 新得郷土研究会)

